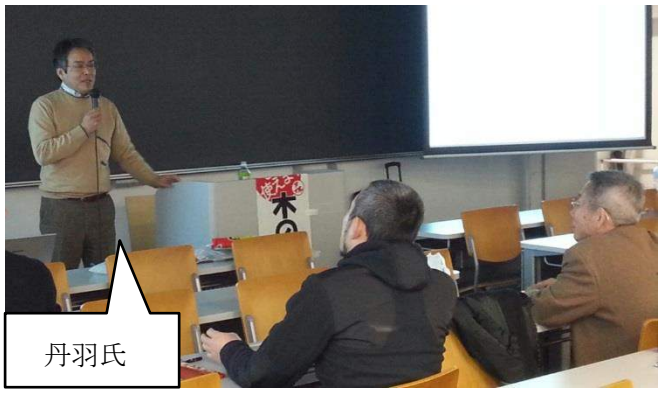
A-WASS 通信　　2 号

編集：木と建築で創造する共生社会実践研究会

第一回研修会報告



日　時　2015 年 3 月 8 日（土）14:30~17:00
場　所　法政大学理工学部建築学科教室
演　題　木の駅が森を拓く
講　師　丹羽健司氏

○講師紹介

丹羽さんは信州大学農学部卒業後、農水省入省、2010 年東海農政局を早期退職し、地域再生マネージャーとして「森の再生」に取り組んでいられます。開口一番、丹羽さんはこんな問いかけをしました。（以下講演の概要）

「突然ですが人口 1400 人の愛知県豊根村の年間エネルギー収支はいくらでしょう。・・・答えは 5 億円です。（名古屋大学高野ゼミ）この 5 億円の 1 割でも地域に回り始めたらこれは新しい仕事をつくる事となり、こんなに小さな村でも 5000 万円がまわる事になるのです。今この 5 億円のほとんどはアラブやアメリカや東京など都会に流れています」

私は矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）というものを立ち上げまして、今は 15 チーム、総勢 270 人くらいの規模となっています。また、山里文化研究所というところで大学生以上の人達で聞き書きを行い、森を支えている村の魂を知りたいと考えています。
夕立森林塾では矢森協を流域意識のつよい矢作だけでなく、他の地域でもつくれないかと考え、庄内川流域にもノウハウ移転し、卒業生は 100 人くらいになりました。そうした人達の中から木の駅を動かしていく人々が育っています。そして鳥取県さんがこの 3 つのノウハウをもってうちにおいでと呼んでくださったのでそちらに早期退職していくことになり、それから 2 年間ですべてのモデルづくりを完成させました。

その時、岐阜県の地域再生機構が小水力発電を始め、再生可能エネルギーに取り組み始めたので、そこにも関り少しずつ枠を広げて動いています。それを見て総務省がこれこそが地域再生だろうと判断し昨年は地域再生マネージャーとして 1 年間愛知県東栄町に入り、今年は長野県根羽村に入っています。

なぜこういうことをやっているかというと山に向き合って欲しいからです。これからは忘れられている山の恵みがキーワードになり、それに感謝することが大事だろうなと考え、そこからこうした取り組みを行っています。

○日本の村と森で何が起こっているのか

今地球上では 1 日 100 種の生物種が絶滅し,1 秒間にサッカー場 1 面の森林が砂漠化し、4 秒間に 1 人が飢えが原因で死亡しています。これが地球上で起こっていることです。これから地球がどうなっていくのかということを 16 年前エクアドルで世界中の研究者たちが集まり話し合いました。欲望をコントロールできない人間には絶望しかないという結論になり、会場が暗くなりました。そこにネイティブインディアンの末裔のピーターバーグが壇上に現れ、「日本に行きましょう」と言い始めました。「日本には鎮守の森を中心とした田で水を分け合う、お互い様という言葉があり、小さな土地で資源を分け合って生きている。そんな日本に行きましょう。そこに希望の光があります。豊田でも大阪でも東京でもない日本の山村に行こう」ということになりました。

ところが、そんな日本では 1 日に 100 人が自殺し、食糧自給率 41%にもかかわらず、1 年に 1 人 150kg の可食ゴミを廃棄して、埼玉県以上 39 万ヘクタールの耕作放棄地があり、木材自給率 22%、人工林の大部分が放置林となっています。そして、何よりも 1 週間に 1 つずつ村が消え、食も人も森も村でさえも捨てられようとしています。そんな状況の中で、山村でなにができるのか森で何できるのかを今日は話していきたいです。

○森を知る　森の健康診断

私は 2000 年 9 月の東海豪雨が森に関る転機となりました。その時、テレビの生中継で小学校が流されていました。豊田市中心部を視るとスタジアムや市役所のすぐ近くまで川が氾濫していて、あと 30 分も雨が続いていたら豊田市は壊滅していたとさえ言われています。

この時、なぜこんなことになったのかという事を聞くと、山のじっちゃん達は山に手を入れないからだと言いました。8 つのダムの最上流の矢作ダムには 4 万 m3 約 50 年分の流木が溜まっていました。すべてその時まで立っていた木でそれが倒され流れ込んできたのです。その傷跡をみると山がほったらかしになっていました。森は光が差さないから草は生えず、表層土が流されているから根がむき出しになっている状態で、いわば歯槽膿漏の山になっていて、いつ倒れてもおかしくない状況でした。

枝が上だけ密集しているため雨粒は上部 20~30m のところから落ちることになります。林の中だと細かい雨粒は集められ大きくなり直径が 4~5 倍になるため地面への衝撃はその 2 乗の 16~25 倍になります。光が入っている森だと低層木や中層木そして落ち葉などによって衝撃がやわらげられますが、不健康な森だとそのまま水滴が強い衝撃でぶつかり土がつぶれていってしまい、表面にチルトの膜ができ表面を水が走ってしまい浸食が起きてしまうのです。

すべての山には持ち主がいてその山主のほとんどが素人であるということが意外にも忘れられています。今から 12 年前ですが山の境界が分かるか山主に聞いたところ、どこでも、3 割の人が自分の山の境界が分からない状況でした。放置林はどれくらいか気になり山主へのアンケートをとると、放置林の割合は半分くらいにしかなりませんでしたが、専門家は 9 割近くだという人までいます。このアンケートの回収率は 78%とかなり高い数値なのに、専門家の意見とずれるのはおかしいと考えました。その結果ほとんどの山主は素人であるということに気付きました。山主は素人であるから山がどんな状態がいいか分からないからこういう違いが出てしまうということに気がついたのです。

だから、こんな放置林がどれだけあるのかは自分達で調べるしかないと思いました。これは、山主がいけないというのではなく、山が危ないということを市民の中から発信していきたくて、今、

山の状態がどうでどこが一番危険でどこから手を出していかなければならないかを知るために地図をつくりたいという気持ちで森の健康診断を始めました。

森の健康診断の竿以外の道具は 100 円グッズで全国どこでもだれでもできるようにセットをつくりました。一チーム 6~8 人でやり、5m 四方で傾斜角、土壌の厚さ、方位、植層など、そして植生の種類数、種類数だけなら同定を調べなくてもできます。次に混み具合調査をします。100m2 の中に植えられた木が何本あってどれくらい生息しているか、直径、樹高なども調べ、相対幹距比や林分形状比を計算します。分からない植物は植物鑑定団によるうんちくを楽しむことができます。そして、そのデータは毎年集め冊子にしたり、インターネット上にアップしたり、誰でも手にできるようにしています。

矢作川流域では、9 年間で 550 地点の調査を市民 2100 人で行いました。それぞれの調査地点間隔 1km です。その結果、放置林の割合は 8~9 割程度で多くの識者が考えていたものと同じになりました。そんな状況を知り豊田市は森づくり委員会をつくり、一年半に 52 回も会議をやりました

豊田市は 20 年間で過密林を無くすことに決め、100 億円をかけることを決意しました。多くの市民参加と科学データが揃い、多くの人があの災害を目の当たりにしたためこれが実現したと考えています。今では、森の健康診断は全国 38 都道府県で進められています。

〇村を知る　「山里の聞き書き」

「村から出て行くことが良いと教えてきたが結果村に一人ぼっちになった、自分達はこの村が好きだからいいが、出て行った孫たちのことが気になる。来るたびに暗い表情がますます暗くなっていく、孫たちが生きていく都会と彼らの将来は大丈夫なのだろうか。」

村が一週間に 1 つのペースで消え神社や祭り、文化も消えていっています。森を支えてきたのは村で持続可能な営みは村にあります。そこで、名もなき都会の民と村の民が出会ってその文化を伝えていくのが、聞き書き塾です。聞き取りはマンツーマンで行います。各自でアポを自由に取り、自由に聞き取ります。回数は自由でどちらにとっても楽しい時になります。

聞き書きでは、聞き手は『相手に受け入れてもらえて良かった』『少し役に立てたかも』話し手は『自分もよくやってきた』『書いてもらってよかった』『もっと話したい』などの声が出てきました。話の 9 割は姑と嫁の愚痴だけど、残りはこの村は良いとこだよね、家族も村も幸せだったよねっていう自己肯定が進み、幸せだったということになります。そうした、持続可能な村の知恵をすくいあげていくことと木の駅プロジェクトはセットで考えています。

〇村と森をつなぐ　木の駅

矢作村では放置林が増加し２０００年の大雨の際にも、川に木が流れ込むなど大きな被害をだしました。こうした被害を防ぐために間伐をするための動きを始めました。それが木の駅です。参加者は木の駅という広場に木を持っていきます。通常Ｃ材は 1t あたり 3000 円のところ 6000 円で買い取ってくれる仕組みです。その差額分をＮＰＯ団体が負担することになっています。だれでもできるからやりやすく 2 週間ほどで 40t ほど集まりました。

もう一つの狙いは地域活性化で、先ほどの支払いを地域通貨で代用し、地元の商店で使うというシステムになっています。それでお金が地域で回り始め地域の活性化につながっていきます。「軽トラとチェーンソーで晩酌を！」を合言葉に進めています。

木の駅に人は常駐しなくていいシステムとなっています。地域通貨との交換は簡単で、簡単にエ

クセル入力したり、ノートに書き込んだりするだけでモリ券がもらえます。木の駅にマニュアルはありますがそれはたたき台のようなもので、実行委員会で一字一句読みあわせをして、自分達で変えていきます。このマニュアルでの肝は、「このプロジェクトは地域一人一人の名誉と信用においてなりたっているものです。」というところです。だれも検品しない、信頼で成り立っているのです。出荷はいつでもいいので自由です。他の山主の山の木を切るには承諾が必要ですが、その利益から山主へのお礼は 10%までです。

木の駅をやった結果、「今までごみに見えていたものが宝になった。」「一人ではきついけど仲間とやるのが楽しい。」「商品が一か月で 3 か月分売れた」、「はじめは豪快に男たちがモリ券で買っていったが、今は奥さんが普通に使われるようになった。」という声が上がってきています。

木の駅はどうすれば始められるかと良く聞かれますが、「本気の山主三人とヨソモノ一人で始められる。」と答えています。このプロジェクトは固定しがちな山村の人間関係に風を通すことになります。いつも山村の集まりは暗いですが、木の駅の集まりはこれからどうしていけばいいか明るい方向に話がいきます。山主が商店やよそ者の行く末を、商店主が山のありようを、よそ者が村の未来を、お互いに思いやり始めます。よそ者一人がものすごく重要でいままでの固定していた議論に風が通ります。この若者を定着させるためになんとかがんばらなきゃとかとがんばり刺激を受けます。

曲り抜きや枝払いなど造材規格が厳しく、太くて重く、搬出する機材も無い、作業委託すると赤字が不安で、林家がＡ・Ｂ用材を出荷するにはハードルが高いのです。しかし、木の駅はどこの林家でも持っている軽トラとチェーンソーででき、時間も体力もＣ材を搬出するくらいの体力はある上、片手間でできるから山林も時間も活用できるため、人も地域も少し元気になります。必要なことは 0.1ha の集積土場（ただし 10t トラックが横づけ可能、伝票、チョーク、メジャー、地域通貨印刷、@3000 円×100t=30 万円、アルバイトかボランティアによる発券、換金作業、実行委員会の準備と開催、そして気持ちです。

全国各地に 40 個近くある木の駅のはじめの逆ザヤは寄付が大半です。逆ザヤはそこでその村の本気がためされるもので助成金をあてにするのではただの間伐材搬出事業になってしまいます。これは自分達のことは自分達で決められるという自治のための実感づくりです。

木の駅設営の極意は学校区を大切にすることで、範囲は小学校区がいいのですが商店が無い場合があるので中学校区をこえない範囲にすることです。また、性善説を基本にし、多様な出番と居場所づくりを行い、素人もよそ者も、こども、女性も多様な人が集まるものとします。既存の業者ではなくいままで山に向かわなかった人達を向かわせる。ハードルを低くしていく。主人公は住民で行政はその一員とすること。本当に行政と住民のやる気の偏在が多く、どっちかしかやる気ないみたいなことがほとんどです。基本的に補助金に依存しない。実行委員会で議論をつくす、フラットでオープンな参加型実行委員会の運営。

これはまったくさっきの森の健康診断と同じで、自治的な営みがこれの基本です。木質バイオマスエネルギーの民主化で、薪は森を、薪ストーブは個人の暮らしを、薪ボイラーは村の自治を変えていきます。ドイツで一番幸せな村のレッテンバッハ村を見つけました。村長は若い時村を逃げ出そうと思いましたがふみとどまり、太陽光パネルを設置したり、木質バイオマスボイラーを設置したり、地域通貨でここの商品を動かすようにしました。これはまさしく木の駅の未来だよねと話しています。

木の駅から始まり、山菜やキノコも宝になり、僕たちはこんな宝に囲まれて暮らしているのだと感じられるようになります。「そうじゃった、何もないと思っていた村には何でもあった、ないものはこの手で作った、山からいただいてきたけぇ。ひとりでできんことは仲間で助け合ってきた。感謝・喜び・誇り。わしらは、山の恵みと人の絆で生きてきた。」と聞き書きの時おばあちゃんたちは

話します。

「美しい村などはじめからあったわけではない。美しく暮らそうという人がいて、美しい村になるのである。」柳田國男

・・

会場では多くの参加者から、共感の声や質問がでました。質問を３つ載せておきます。

（花岡）

質問：逆ザヤが無くなっていって自立していく仕組みはないのでしょうか？

丹羽さん：今、根羽でそうしたシステムができそうです。ふつうの木の駅だと 500ｔくらいで、それは特養の老人ホーム小さな温泉で使う量程度で、それだけで回せるようになります。木の駅はトレーニングの場で自分達の村で少しでもお金を回せるようになると、それはいい村になります。お金がぐるぐる回って物もぐるぐる回ってそれが煙になって見える。それが自分達でコントロールできるようになる。そうすると自治が育っていき良い村ができる。だから、重要なことはいかに村民でコントロールできるシステムをつくるかになってきます。それはまず、自分達の村と向き合う、まず薪が使える公共施設を探すことから始まります。次にその施設の設備の償却期間を調べそれに合わせて計画します。そうすることによって逆ザヤが必要なくなり持続可能な村づくり、森づくりにつながります。そして、お荷物だった山に向き合うということが自然に出来てくるのではないかという夢を根羽村にかけています。

質問：農業、林業、個別の山が個人の財産というであるという枠を乗り越えることはできるのでしょうか？

丹羽さん：これは難しい問題だと思います。いままでよそものを受け入れていなかった山ですが、徐々に人を受け入れはじめているから、これからそれらをうまくやるシステムを造ってくれる人が出てくることを願うとしか言えません。
ただこれは林業とか農業ということでなく、自治が大切でこれがどんどん面白くなっていくと思います。普通、会合は少なくなるものですが木の駅の会合は増え続けています。これを上手くやると、山も商店も村も変わっていくという道具を示すことで、どんどんいろんな展開が生まれています。

質問：材として使うことに関してはどのように考えていますか？

丹羽さん：これからは木を使おうという動きだけじゃ森は救えない。僕がやっている森の健康診断と木の駅はトレードオフの関係なんです。緊急的に求められていることは間伐でそれで国土を守っていくことで、そのことについてのコンセンサスは得やすいので、そこをつくっていかなければならない。林業において 45000 人しかプロが居ない状況でそれが出来るかというと出来そうにない。それを木を使う方向にもっていくとうまくいかないけれども、それをしないと山主さんはこっちを向いてくれない。現勢力のなかでやるとそれはトレードオフになるけど、新しい人を開拓すれば、トレードオフはやわらげられる。それが素人さんで、これから森林をどうにかしますという政策をする時に都市住民の票をもっていくために森の健康診断をやっています。

東海地区：木と建築で創造する共生社会研究センター（WASS 東海）レポート

WASS 東海の発足は、昨 2013 年の 7 月で、ちょうど東洋大学に拠点をおいて展開された第 1 期 WASS（2007 年～2012 年 3 月）と本年 3 月に発足した木と建築で創造する共生社会実践研究会（A-WASS）の幕間の時期にあたります。

呼びかけ人は、(株)エスウッドの角田と(株)山共の田口さんでしたが、いずれも第 1 期 WASS のメンバーで、実は現 A-WASS 事務局長である花岡さんからの強いお勧めをうけてのアクションでした。

出発にあたっての共通確認は、

１、「木と建築を通じて共生社会の実現を目指す最重要現場は、地域でしょう！」

２、「分野・職域を横断する諸個人の自由な交流がないと、個々の貴重な活動や経験が一つの力になっていかないよね。そうだ、サロンを作ろう！」

３、「具体的な活動計画なんて、はじめからはできやしないんだから、とにかくはスタートさせて、泳ぎながら泳ぎをおぼえようぜ！」

といったところで、まあ、実にアバウトにしてシンプルなものでした。

ところが、呼びかけてみると、各分野でのトップクラスの人材が発足メンバーとして結集、工務店経営者の卵にして大学院生、一流の木造設計者にして NPO リーダー、木造設計の専門家として日々人材育成に尽力中の教育者、行政の壁を軽々と越えて活躍する行政パーソン、建材や木製家具の分野で長く研究を積み重ねてきた公設研究所のベテラン研究員、第 3 セクターにて中小企業の多面的支援に奮闘中の大学名誉教授、実務に精通した建築士等のスタッフを率いて急成長中の建築事務所代表、国立大学准教授にして「都市木質化プロジェクト」を行動力で推進する理系＝文系女子、といった具合です。

で、呼びかけ人から世話人に横滑りした私たちは、戦々恐々としながら、会の運営にあたっているわけです。

これまで、2 か月に 1 度のペースで勉強会を開催してきました。その都度、会員外の友人・知人に声をかけつつ、お互いの関心事項を摺合せ、問題意識を共有するための中身の濃い活動を継続していますが、これまでに会員外の参加リストは 25 名に及んでいます。

さて、こうした作業の中から、より具体的で実践的なテーマがおぼろげながら浮かんできました。そろそろ、広く学びつつ、深く掘り下げる、次のステップについて検討しようと考えています。

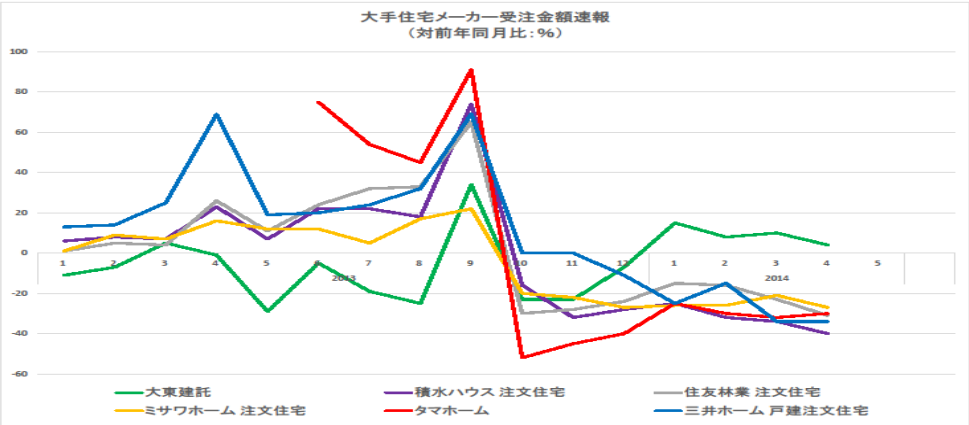
（写真）第 5 回勉強会の様子　テーマ「都市の木質化」

（A-WASS 運営委員　角田　惇）

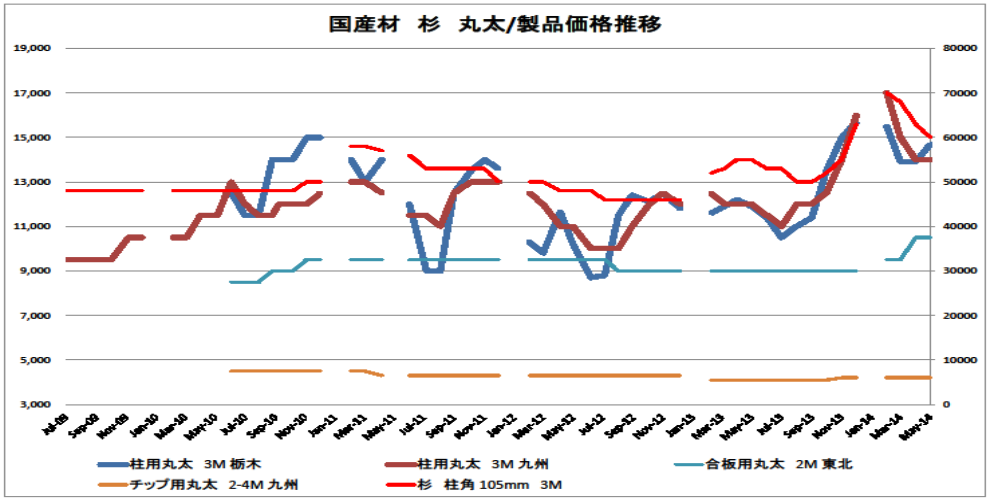
二国レポートⅡ

日本の林業は「持続可能ではない」

まず、前回の継続で、大手住宅メーカーの対前年比の受注金額速報の推移を確認しておく。3・4月も受注は低迷しており、これで8月までの住宅用木材需要の低迷が確実と思われる。

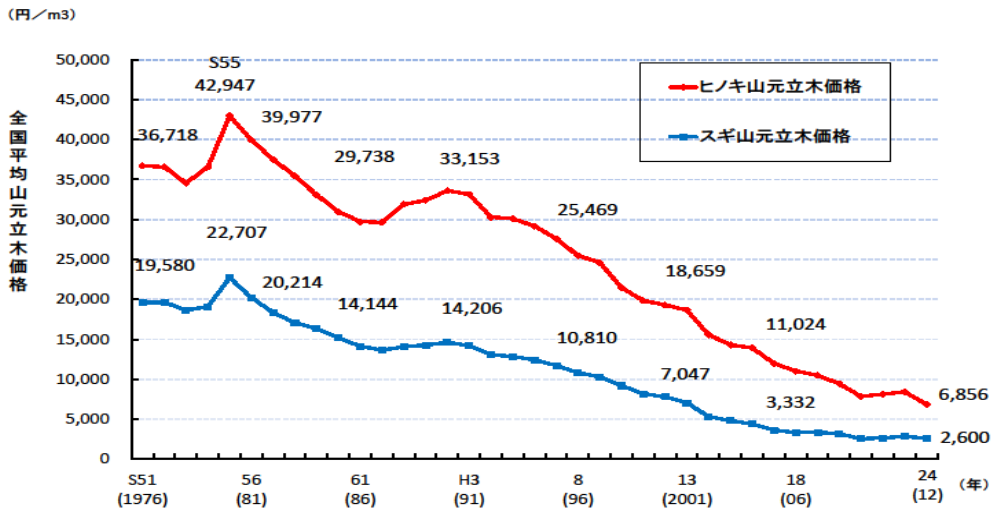


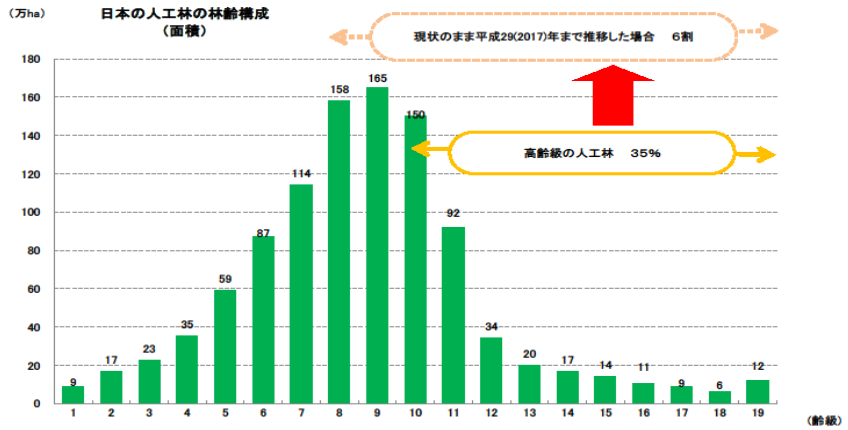
但し、原木価格は年明け後急落したが、現在の処特にスギは価格を維持している。これはB材需要の合板がしっかりしている事とバイオマス用のC+D材需要が出始めており、下材の価格が下支えしている為でスギに反してヒノキは原木価格の下落が止まらず一部地域ではスギとの価格逆転が出始めている。



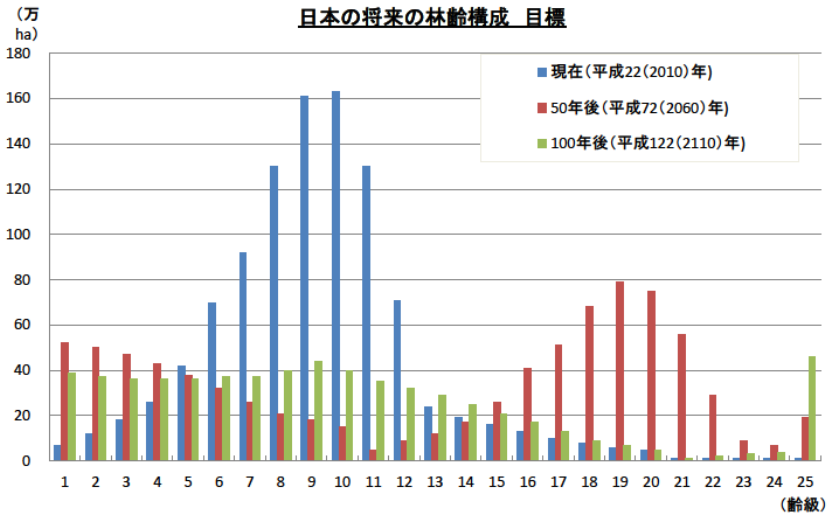
日本の林業が「持続可能ではない」とはどう言う意味か？

立木価格が低迷し続けており、もはや補助金なしでは再造林する経費が出ず已む無く間伐で誤魔化し、植林をやらない状態が10年以上続いている。既に植林面積は年間3万ha以下となり、50年後には樹齢40年から50年の建築材適木が山にない状態となる。更に資産価値のなくなった人工林山林は誰も見向きもしなくなり、拡大造林で借金をした林業公社は次々と破たんしている。この現状は決して「持続可能な林業」ではない。





林野庁は林業白書の中で「日本の将来の林齢構成　目標」なるグラフを掲載しているが、良く数字を見ると、今後 50 年間毎年植林面積が増えて毎年 5 万～10 万 ha 以上の新規植林がされれば・・・・・との前提に立っている。これこそ「絵に描いた餅」としか言いようがない。



補助金なしでも伐採後植林＋育林の経費以上が出る処まで「立木価格を上げる」仕組み作り＝立木が製材品となるまでの全ての工程での徹底したコスト削減を進めなければならない。

以上

A-WASS が取り組むべき課題と活動フレームについて

平成 26 年 5 月 13 日
A-WASS 事務局

1．A-WASS は、その会則にも謳われているとおり「共生社会の理念の実現に向けて総合的・実践的に活動すること」を目指しています。

2．その観点から、A-WASS の活動は、個々の会員・会友の断片的な興味や関心のみに依拠した「つまみ食い」ではなく、4 月 5 日（土）の A-WASS 研修会の際に提起させていただいたとおり、取り組むべき課題の全体像とそれらの課題を克服するための活動のフレーム（海図・航図に相当するもの）を明確にした上で進めるべきと考えます。

3．同研修会の際には、A-WASS が取り組むべき課題を、大まかに、①持続可能な森林資源の活用が図られていないこと、②地域に根差した建築・産業・文化の継承が危い状況にあること、③建築やエネルギー利用の構造が自立的でないこと、の３つと仮置きし、それらの背景要因を「課題ツリー」として分解した上で、分解された課題のそれぞれに対応した活動を浮かび上がらせるという「プロジェクト・サイクル・マネジメント（PCM）」にならった手法を提案させていただきました。

4．また、課題・活動ツリーを運営委員会でブラッシュアップし、会員・会友に提示して、ご意見をいただきながら完成させていきたいと提案し、ご賛同いただきました。

5．その後、運営委員会において、別紙のとおり、課題ツリーを整理し、課題ごとに、その克服のために A-WASS として進めるべき活動の方向性（案）をとりまとめました。

6．「優先度、妥当性」の欄は、項目によって、A-WASS として優先的に取り組むべき課題か、A-WASS が比較優位を有しているか、といった観点から評価してみたものであり、当面、「◎」の活動を中心に進めていくことが妥当と考えられます。

7．なお、この表は、とりあえずのものとして整理したものであり、今後、会員・会友の皆様からもご意見をいただき、さらに改善・充実させていくことを想定しています。皆様からのご意見をお待ちしています。

※4 月 5 日のセミナー、5 月 3 日の事務局会議でこの活動フレームを話し合いました。調査・研究中心の WASS から、実践を目指す A-WASS は提案された個々の活動が会の目的達成の上でどのような位置を占めるのかをより深く吟味していく必要があります。現状の問題―課題―解決の方策―実践―反省の歩みをするためにも、たどり着いた結論を振り返るためにも大きな見取り図を描いておくことが大切だと考えました。このフレームを基に、3~5 年の活動の見通し、当面の活動、今年取り組む活動を明らかにしていきます。機会あるごとにご意見を交わしていきます。（花岡）

A-WASS 課題ツリーと活動フレーム

H26.5.3 整理中

課題ツリー			課題克服のために考えられる活動の方向	優先度妥当性
課題 1	持続可能な森林資源の活用が図られていない			
1−1	持続可能な森林資源の活用の意義について、理解が不足している			
	(1)	森林資源(特に地域材)を利用することの意義(＝自然環境、地域経済、教育文化、心身の健康などの多様な側面)が体系的に整理されていない	調査研究活動 「木はいいんだ」 ① 木材利用が発揮する多面的な機能の体系的な整理(持続的に生産された木材とそうでないものとの差別化を含む) ② 分かりやすい普及媒体の作成 ③ 成果の普及・浸透に向けた戦略の構築	◎
	(2)	森林資源を活用することの意義を分かりやすくかつ効果的に伝える媒体や手法が未開発又は不足している		
	(3)	消費者や建築・物販等に関わる関係者が各種資源の利用の意義や影響(環境負荷等)に対して関心を払わない		
	(4)	持続的に生産された木材製品等と非持続的に生産された木材製品等とが市場で差別化されていない(持続的に生産されたものを消費者は自由に選択できない)		
1−2	森林資源の活用に関わるノウハウ・人材・インフラが不足している			
	(1)	森林資源(木材)を安定的・効率的・持続的に供給するための林業生産体制(林地境界明確化、集約化、機械化、路網、生産技術、労働力等)が整っていない	林業生産体制の整備方策についての研究と提示	▲
	(2)	高度な設計や施工技術等がなくても木材を活用できる「当たり前」の建築手法等が普及浸透していない	木材を活用した「当たり前」の建築手法等の整理と普及	○
	(3)	建築やエネルギーにおける木材利用の検討対象が構造部材や大規模発電に偏重している	非構造部材(内装等)や小規模・熱利用等のシステムの検討、モデルの提示	○
	(4)	森林資源(木材)と代替資材(RC等)とのコスト比較の考え方や手法が不明確(条件の違い等を無視してどちらが安い・高いといった単純な議論から先に進まない)	森林資源(木材)と代替資材(RC等)とのコスト比較の考え方や手法の整理と普及 【1−1 「木はいいんだ」とも関連】	◎
	(5)	人工林(針葉樹)材の加工・利用に必要な設備の不足(特に紙パ業界)	人工林(針葉樹)材製品の需要掘り起こし方策の検討、関係業界への呼びかけ	▲
1−3	競合する代替資源の利便性が高く入手が容易である(価格面等)			
	(1)	効率性重視の生産・消費構造が浸透している	持続的生産・消費モデルの研究と提示、地域レベルでの実践 【3 「自立的意思決定システム」とも関連】	◎
	(2)	代替資源(主に化石燃料由来)の利用に適したインフラ等の整備が進んでしまっている	既存インフラを最大限活かしつつ森林資源を利用する手法の研究と提示	▲
	(3)	代替資源(主に化石燃料由来)の利用に伴う環境負荷等の社会的コストが正しく認識されず、価格等にも反映されていない	各種代替資源の利用に伴う社会的コストの研究、環境税等の制度の研究	▲
1−4	森林資源の活用に関わる関係者間の相互理解が不足している、利害が対立している			
	(1)	関係者がWIN−WINの関係になり得ることやそのための条件や手法、合意形成の必要性等について理解が浸透していない	調査研究活動 「第1期WASS」 第1期WASSの成果の整理と提示(優良事例だけでなく、うまくいかない事例とその要因等も整理)、地域レベルでの実践とモデルの確立 【3 「自律的意思決定システム」とも関連】	◎
	(2)	消費者や建築・物販関係者等のニーズに対する林業・木材関係者の理解が不足している、関心が低い		
	(3)	林業・木材業界の状況や木材特有の制約等に対する消費者や建築・物販関係者等の理解が不足している、関心が低い		
	(4)	自己の損失やリスクを回避し他者に押し付けようというビヘイビアが結局は(長い目で見れば)排除されるような仕組みがない	第1期WASSの成果を踏まえつつ、性悪者排除の仕組みを研究、提示	▲

A-WASS 課題ツリーと活動フレーム

H26.5.3 整理中

課題ツリー	課題克服のために考えられる活動の方向	優先度妥当性
課題 2　地域に根差した建築・産業・文化の継承が図られていない	調査研究活動「地域に根差した文化」 特定の地域を選び、その地域独特の建築・産業・文化について ① どのようなものがあるのか、歴史的背景、現状等について調査・整理（棚卸し） ② ①が地域にもたらしてきた、及び将来もたらすであろう恩恵、並びに、これらが失われた場合の損失等について分析・整理 ③ ①のうち、特に継承すべきものの明確化、継承に向けた戦略の検討・構築 ④ 当該地域での継承に向けた体制構築等の実践（関係者へのアプローチ） 【3「自律的意思決定システム」とも関連】	◎
2－1　継承することの意義について、理解が不足している		
(1)　地域に根差した技術や文化の背景にある知恵や歴史（資源の有効利用や自然との共生、地域社会の調和など、現代や将来にも通じるものであることや地域のアイデンティティに関わるものであること等）に対する理解と評価が不足している		
(2)　地域特有の技術や文化、伝統＝劣っている、不便、非効率、洗練されていない、などとの思い込み（決め付け）が浸透している（過去にそのような経験があったかも知れないが・・・）		
2－2　継承するための戦略や方法論、手段が不足している		
(1)　継承すべき技術等の内容やそれらを継承する意義、将来どのように活かすべきか等について体系的に整理されていない		
(2)　継承の手段が不足している又は未開発（個人レベルの口伝え、見様見まね、一生かけた体得等に依存し、地域全体で継承する仕組みがない又は失われてしまった）		
2－3　代替する技術や文化が浸透しており、容易に活用できる		
(1)　画一的な技術や文化の活用に適した経済社会システム（例：大手ハウスメーカーの販売・施工体制、画一的な工業製品を前提とした市場流通システムなど）がすでに定着している		
(2)　多くの一般的消費者にとって、画一的な技術や文化に浴した方が安心である（逆に、地域に根差した技術等には当たり外れがあり安心感が低い）		
課題 3　自立的な建築やエネルギー利用が図られていない	調査研究活動「自立的意思決定システム」 建築やエネルギー利用について ① 諸外国を含む国内外の事例研究、自立的な意思決定モデルの検討・整理 ② 自立的であることとはどういうことか、そのメリット等について整理 ③ 現行の諸制度・システムがはらむ問題の明確化 ④ 地域レベルでの自立的意思決定システムへの転換に向けた戦略の検討・構築 ⑤ 自立的な意思決定システムへの転換を主導しうる人材（特に首長）の特定、ネットワークの構築 ⑥ 具体の地域レベルでの実践（首長をはじめとする実践主導者へのアプローチ）	◎
3－1　自立的であることの意義・メリットへの理解が不足している		
(1)　自立的な建築やエネルギー利用がもたらす（地域社会及び国全体への）メリットについて整理されていない		
(2)　そもそも自立的でない現状に気づいていない、自立的でないことの弊害に対する危機感が欠如している		
3－2　非自立的な建築・エネルギー利用が普及浸透している		
(1)　画一的な建築やエネルギー利用を前提とした制度・意思決定システム（下記の制度等）がすでに定着している（思考停止状態又は克服に多大なエネルギーが必要） ○ 調達・入札制度（単年度主義など） ○ プロポーザルの公募・選定プロセス ○ 建築基準		
(2)　画一的な建築やエネルギー利用でメリットを受ける経済社会システム（例：大手ゼネコンを中心とする受注・施工体制、資金繰り・金融システム）がすでに定着している		
3－3　自立的な建築・エネルギー利用に転換するためのノウハウ、モデルが不足している		
(1)　自立的な建築やエネルギー利用のための（多種多様な）制度・意思決定システムのあり方やそのようなシステムの導入に必要な条件・手法等が整理されていない		
(2)　自立的な建築やエネルギー利用について理解し主導できる人材（首長など）の不足・未開拓		
(3)　自立的な建築やエネルギー利用への転換を具体的に地域レベルで実践していくための戦略がない		

事務局から

○全国首長連携交流会（第 19 回）に問題提起報告（5 月 16 日、17 日）会場：政策研究大学院大学

全国首長連携交流会（会長　松崎秀樹千葉県浦安市長）、今年の主題は、「地域の自立・持続可能性を考える」でした。

5 月 8 日日本創成会議・人口減少問題検討委員会の「成長を続ける 21 世紀のために、ストップ少子化・地方元気戦略」（HP で全容が分かる）の報告が、箱根・日光市も含む８９６の自治体が 2050 年消滅するという予測。交流会では、国交省「新たな『国土のグランドデザイン』骨子」（26 年 3 月）総務省過疎対策室の議論（20 万，5 万、真基幹集落の三つのダムが地域を守る）が審議官や課長補佐から説明されました。（事務局に資料があります）

A-WASS から、網野教授が「小さなコミュニティーが活きる持続的成熟社会構想」が提案され、従来否定的な見方をされてきた“小さな地方社会”を”コンパクトで効率の良い環境共生社会“と捉え直し、”高齢化や経済疲弊“など本邦の地方社会問題解決と魅力ある住環境創出を目指すプロジェクト提案であると A-WASS の研究・実践の考えを提起しました。長澤会長は”木の学校づくりを核とした WASS の調査・研究“をもとに、A-WASS の実践方向として①新しい学校観（小学校は地域に残す）②木の建築と木質エネルギーの活用③公共施設の老朽化対策（学校を地域の核に再生）④補い合う地域間連携ネットワークを提起されました。

8 月の提言・実践首長会に向けて、部会で一緒の山下祐介氏（首都大学東京准教授・社会学）と A-WASS メンバーの議論の場をつくり、提案していきます。

○A-WASS の実践活動の一つに、地域（自治体・住民グループ）からの要請に基づいて、謝金なしの講師派遣を考えています。研究者のみならず、森林経営、製材所経営、加工所経営、木の学校建築の計画・構造設計・意匠設計、設備設計、家具・建具製作、学校木質化の内装設計、バイオマスエネルギーのアドバイスなど会員の力を社会に還元し、A-WASS の理念を広める活動です。この広報活動から、具体的な仕事に結びついたときは、会員の所属する企業の業務として責任もって取り組んでいただきます。

○今後の予定

- 5 月 29 日（木）市有林・町村有林を活用した木の学校づくりにおける問題点・課題、解決の具体事例、残された課題、制度改正への提言を WASS の蓄積研究と新たな事例調査でまとめます。その調査・整理項目の素案作りを運営委員会で行います。
- 6 月 7 日（土）15 時から、森の贈り物研究会“美夢”で、会員セミナー「木質バイオマス基礎講座①」を開きます。講師：岡本さん㈱トモエテクノ)
- 7 月 5 日（土）15 時から、法政大学市谷校舎　第 3 回研修会を開きます。演題・講師は 5 月 31 日の運営委員会で決定。
- 事務局に常駐は難しいのですが、毎週土曜日は、事務所におります。事前に携帯に電話を。（花岡）

～皆様のご意見を歓迎いたします～
A-WASS 事務局(森の贈り物研究会内)
〒103-0004　東京都中央区東日本橋 3-8-1
東日本橋コーポラス１F
TEL: 03-3249-0421 FAX:03-3249-5133
E-mail:hanaoka@bdvision.co.jp
事務局長　花岡携帯：090-4063-8468